

伝承すゝめ

第十八号

現代語訳

「風姿花伝」を読んで

明日香村伝承芸能保存会

会長 岡崎義男

志貴皇子の懽^{よろこ}びの御歌一首

巻八の一四一八

石ばしる 垂水の上の
さわらびの 萌え出づる春に
なりにけるかも

水温み、陽光降り注ぐよい季節になってまいりました。定例公演を開始致しました。

四月一日石舞台公園で恒例になっています「飛鳥蹴鞠の日」と銘打った「飛鳥蹴鞠」を観光客に体験していただきました。奈良県立万葉文化館で、八日「万葉朗唱」十五日「八雲琴」二

十二日「南無天踊り」を披露しました。いずれも驚くほどの鑑賞者で出演者一同、身の引き締まる思いと、この時に備えて練習を重ねてきた成果を十分に発揮しようと思気込みました。成果は上々、盛大な拍手と賞賛のお声がけまできました。

昔から、スポーツや芸事は「練習は本番通りに、本番は練習通りに」と言われているように練習の大切さを実感致しました。

そこで、感動の熱の冷めないうちに、芸能の聖典と言われている世阿弥著「風姿花伝」を読みました。しかし、現代語訳といっても六〇〇年以前に書かれたものですので、時代背景も前後のつながりも分からず、全くの消化不良に終わりました。「初心忘るべからず」とか「秘すれば花なり」等々、耳にしたことが出てきますが深い意味があつて、なかなか理解しがたく難渋しまし

た。今回得たことは、「風姿花伝」と言う題名のいわれが分かりました。世阿弥は「先人からの芸の風姿(伝統)を継承しつつ、心から心へと言葉を超越して伝授していく「花」(美しいもの、きれいなもの、みごとなもの、はなやかなもの)が大切だと言う意味合いで「風姿花伝」と名付けたのだと言っています。

演劇や芸術・教育等広範にわたる不滅の価値をもつ「風姿花伝」を、機会があれば専門の先生のカルチャースクールに通い、時にはお茶など飲み雑談を交わしながら解説していただいたらより理解も深まり楽しいだろうなと思っています。



八雲琴

八雲琴について

脇田初枝

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣つくる その八重垣を

この歌は須佐之男命(すさのおのみこと)が出雲の国で八岐大蛇(やまたのおろち)を退治され、須賀の地に、櫛名田姫(くしなだひめ)との宮殿を造営される時、雲が立ち昇る様子を見て詠まれたもので、この時この琴を弾かれたと言われています。また、埴輪のなかに、この琴を抱いているものが出土しています。

八雲琴は、絹糸で出来た二本の絃を張った二絃琴で、古事記に記されている須佐之男命が持っていた「天の詔琴」が発祥であると言われています。二本の絃は「天と地」「男と女」の二つになぞらえ、開放絃を同調に調絃することにより、和合を表しています。

現在の八雲琴は江戸後期文政の頃、伊予の中山琴主(ことぬし)が再興し、全国に広められたものです。

飛鳥寺長老であられた第七世山本震琴(しんきん)師は、八雲琴演奏者として国の無形文化財の指定を受けておられ、生涯長きにわたり八雲琴を保存伝承されました。口伝であったたくさん曲を採譜され、また神前楽器であったこの琴を広く東洋音楽として紹介なさいました。

「明日香村伝承芸能保存会・明日香の響保存会」(昭和五十五年結成)はそれを受け継ぎ、古代の心を今に伝えると共に、後継者の育成に取り組んでいきます。

平成十七年度「第二十五回伝統文化ポラ賞の地域賞」を受賞しました。

伝統芸能として、小学生中学生、若い世代への指導に力を注いでいるところです。

また、平成二十一年二月明日香村無形文化財指定を受け



平成 29 年 4 月 15 日 「にざわいフェスタ万葉・春」 於：奈良県立万葉文化館

十六年度から二十一年度まで毎年申請をし、採択していただき、こども教室の指導を続けることが出来ました。

その後も続けてこども教室は早や十四年になります。その間に聖徳中学校総合学習明日香学での指導も始まり、また、二十八年度は明日香小学校クラブ活動で八名のこども達への指導もありました。

この十数年の間で、多いときは三十名以上のこども達へ指導をしましたが、保存会備品の八雲琴が不足し、何面かのご寄贈もありましたが、指導者達の私物の琴を貸し出して対応、嬉しい悲鳴です。

こども達、そして後継者の方達にこの八雲琴の素晴らしさと、伝統楽器(音楽)として後世へ伝えていくべき大切な我が国の民族の宝という意識を持って習得して下さるようにと願いつつ指導させていただいています。

八雲琴で演奏される (歌われる)万葉集

一「芳野曲(よしぬぶり)
(前段)巻一(二五)

天武天皇

みよしのの耳我の嶺に 時無くぞ雪は降りける 間無くぞ雨は降りける その雪の時無きがごと その雨の間無きがごと 隈もおちず 思いつづぞ来る その山道を

「吉野の耳我の峯に、時も定めず雪は降っているよ。絶え間なく雨が降っているよ。その雪の時のきまりのないように、その雨の絶え間の無いように、曲がってゆく道の角々一つ残さず、物思ひしながらやって来ることだ。その山道を。」

「芳野曲」(後段)

巻一(二七) 天武天皇

淑人(よきひと)の よしとよく見て
よしといひし 芳野よく見よ
よき人よく見つ

「昔のよい人が、よいところだとよく見て、よいと云った吉野をよくごらん。今のよい人もよくごらん。」

二「明日香風」

巻一(五一) 志貴皇子

采女の 袖吹きかえず 明日香風
都を遠み いたずらに吹く

「藤原京より一日飛鳥を散策された時、その郷愁をうたわれたもので、飛鳥朝廷に仕えていた、才媛にして容姿端麗な官女の袖を吹き返したふくよかな風も、今はその主なくして空しく吹いている。」

三「吾大君(わがおおきみ)」

巻三(二三九) 柿本人麻呂

やすみしし 吾が大君 高照らす
吾が日の皇子の 馬並めて
み獵たたせる 若薦を 獵路の
小野にししこそは い這ひ拜め

鶉こそ い這ひもとほれ ししじもの
い這ひ拜み 鶉なす い這ひもとほり
かしこみと 仕へ奉りて ひさかたの
天見るごとく まそ鏡
仰ぎて見れど 春草の いやめずらしき
吾が おほきみかも

「八隅を知ろしめす吾が大君、大空高く照らす日の皇子が、馬を並べてみ獵を催される獵路の小野に、鹿や猪こそは這ってお辞儀をし、鶉こそは這ひまはりまする。その鹿や猪のように這ってお辞儀をし、鶉のように這ひまはり、かしこまり、お仕え申して、天上を見るように仰ぎ見るけれど、いよいよ心惹かれる吾が大君であることよ。」

四「振放曲(ふりさけぶり)」

巻三(三一七) 山辺赤人

天地の 分れし時ゆ 神さびて
高く貴き 駿河なる 不盡の高嶺を
天の原 振り放け見れば 渡る日の
影も隠らひ 照る月の 光も見えず
白雲も い行きはばかり
時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ
言い継ぎ行かむ 不盡の高嶺は

反歌：(三一八)

田児の浦ゆ うち出でて見れば
真白にぞ 不盡の高嶺に 雪は降りける

「天と地が初めて分れてできた時から、神々しくて、高く、尊い姿をしている駿河にある富士の高嶺を、天上はるかに振り仰いで見ると、空を渡る太陽の姿も隠れ隠れし、照る月の光も見えない。白雲も山をはばかって進みかね、時ならず雪が降り積もっている。後の世まで語り継ぎ、言い継いで行こう。この富士の高嶺をば。」

(反歌) 田子の浦を通過して出ると、真っ白く富士の高嶺には雪が降り積もっているよ。富士山の神々しい姿を詠んだ歌。

五「奈良の都」(四季の歌の春)」

巻三(三二八) 小野 老

あおによし 奈良の都は 咲く花の
にはふがごとく 今盛りなり

「奈良の都は咲く花の匂うように、今真っ盛りであることだ。遠い太宰府にいて、都への憧憬の念

が生み出した平城京讃美の歌。」

六「神奈備曲(かなびぶり)」

(二) 巻八(一四一九)

鏡王女

神奈備の 伊波瀬の社の 喚子鳥
いたく鳴きそ 吾が恋まさる

「神奈備の岩瀬の森の喚子鳥、あんまりひどくは鳴くな。そんな



なに鳴いては、私が人を恋しく
思ふ心が増すばかりだから。」

「神奈備曲」(一)

卷八(一四六六) 志貴皇子

神名火の 磐瀬の杜の ほとと
ぎす 毛無しの丘に 何時か来
鳴かむ

「神名火の磐瀬の森のほととぎす
は、この毛無しの丘には何時に
なったら、来鳴くことであろう
か。(早く来ないかなア。と言う
思い。)」

七「春霞」

卷八(一四五〇) 坂上郎女

心ぐき ものにぞありける 春が
すみ たなびく時に 恋の繁きは
「何となく、心なやましく じ
れったい思ひのするものですよ。
春霞のたなびく時に恋しい思ひ
のしきりにするのは。」

八「夏の歌」(四季の歌)

卷八(一五〇〇) 坂上郎女

夏の野の繁みに咲ける 姫百合
の 知らえぬ恋は 苦しきものぞ

「夏の野の草の繁みに咲いている、
姫百合のように、相手に知られ
ない恋は、苦しいものよ。」

九「秋風曲」(あきかぜぶり)

卷八(一五二三) 山上憶良

秋風の 吹きにし日より いっし
かと 吾が待ち恋し 君ぞ来ま
せる

「秋風の吹きそめた日から、いつ
か早くと、私が待ち焦がれた君
がいらいしやったよ。」

十「秋の歌」(四季の歌)

卷八(一五五四) 大伴家持

大君の 三笠の山の もみじ葉は
今日の時雨に 散りか過ぎなん
「三笠の山のもみじ葉は、今日の
時雨で散ってしまうのではないだ
ろうか。」

十一「佛の前の唄歌」

(うたいうた)

卷八(一五九四) 作者不詳

時雨の雨 間無くなふりそ 紅
に 匂へる山の 散らまく惜しも
「しぐれの雨よ、絶え間なく降る
な。紅色に染まった山のもみじの

散る事が、惜しいことよ。」

十二「冬の歌」(四季の歌)

卷八(一六五八) 光明皇后

吾が背子と ふたり見ませば い
くばくか この降る雪の うれし
からまし

「我が夫の君と二人で見るので
あったら、どんなにかこの降る雪
が、嬉しい事でありますう
に。」

十三「神依板」(かみよりいた)

卷九(一七七三)

或る女性から

弓削皇子に奉った歌

神奈備の 神依板に する杉の
思いも過ぎず 恋のしげきに

「神奈備の丘に茂っている杉の老
木で、神を 招くために叩く板
(神依板)を作るが、枝が縦横に
交わり鬱蒼たる様は、誠に美事
で想像もできない(思いも過ぎ
ず)。そのように、あなたをお
慕いする者はいっぱいおられます
が、どうぞ、私一人に心を寄せ
て欲しいという願いを込めた
歌。」

十四「立春の曲」

卷十(一八一二)

柿本人麻呂歌集

ひさかたの 天の香久山 この夕



平成29年1月26日「伝承芸能鑑賞会」終了後の体験 於：高取国際高校

べ霞たなびく 春立つらしも

「天の香久山、その香久山は、この夕つ方霞がたなびいている。ああ！春が来るらしい。」

つくづくと季節の推移をかんじている。」

十五「垂り柳」

卷十(一八九六)

柿本人麻呂歌集

春されば 垂り柳の とををにも 妹は心に 乗りにつけるかも

「春になると、しだり柳のたをたをとたわむように、たわむばかりに妹のことが、心に乘ったことであるよ。」

十六「挿頭の萩(かぎしのはぎ)」

卷十(二二二五)

柿本人麻呂歌集

吾が背子が 挿頭の萩に 置く露を さやかに見よと 月は照るらし

「あなたのかぎしの萩に置く露を、はつきり見よとばかりに、月がこんなに明らかに照っているらしい。」



十七「荒乳曲(あらちぶり)」

卷十(二三三一)

柿本人麻呂歌集

八田の野の 浅茅色づく 有乳山 峯の沫雪 寒く降るらし

「八田の野の 浅茅が色づいた。今頃は越前の愛発山の峯には、沫雪が寒く降っている事である。」

十八「わがもう君」

卷十一(二三八二)

柿本人麻呂歌集

うち日刺す 宮道を人は 満ち行けどわがもう君は ただひりのみ

「宮廷に通う道を、人はいっぱいに行くけれど、私の思う方はただ一人だけです」

十九「飛鳥川」

卷十三(三二六七)

作者不詳

飛鳥川 瀬々の玉藻の 打ちなびき 心は妹に 寄りにけるかも
「飛鳥川の瀬々の玉藻のように、ひたむきに、心はあなたに寄ってしまったことだ。」

二十「春の苑」

卷十九(四一三九)

大伴家持

春の苑 ぐれないにほふ 桃の花 下照る道に いで立つ乙女

「春の苑の紅色に照り映えている桃の花。その花で樹下が照るまどになっている道にいで立つ乙女よ。」

二十一「初音曲(はつねぶり)」

卷二十(四四九三)

大伴家持

初春の 初子の今日の 玉簾 手に執るからに 揺らぐ玉の緒

「正月、初子の日に頂戴しました玉簾を手には執るだけで、簾に飾ってある玉が触れ合い、音を立てていることよ」

初子の日に清め払う古代行事を歌うもので、古来より年賀の歌に合わす習わし。玉簾はコウヤボウキの枝を束ねて作ったもので、蚕の床を掃くのに用いられた。

平成二十九年 春

万葉朗唱

万葉朗唱への想い

岡崎満洲子

私が、伝承芸能へ入会し、万葉朗唱に入部しましたのは、大先輩である橋本さんに勧められ入部させて頂きました。あれから十一年の月日が経ちました。入部をしたものの欠席する事が多く、また歌うことが難しく、とまどった事もありました。でも皆様に励まされ、今日迄続けられる事が出来ました。最近は何とか欠席せずせすに、出来るだけ都合をつけて出席出来る様になっています。

伝承芸能保存会主催の「万葉講座」では、講師の岡本先生作曲の「つらつら椿」のテーマソングの合唱に始まり、当日習った万葉集から十数首を声に出して朗唱し、楽しく勉強しています。また毎回、昔の唱歌を一曲歌うコーナーもあり、私の生きがいの一つになっています。

一昨年九月には、国営飛鳥

歴史公園キトラ古墳周辺地区開園記念行事に出演しました。

会場は雨上がりの芝生が、水を含んでいて歩きにくく、舞台用の靴もずいぶんぬれた事を思い出しますが、勝川先生のご指導のもと無事終了する事が出来ました。

また十二月四日に、奈良県の記紀万葉フェスティバルの一環として、犬養万葉記念館主催事業「明日香万葉朗唱の発表会」が、明日香村中央公民館で開催されました。館長の岡本先生のご指導により、第一部は万葉

明日香万葉朗唱講座

主催・明日香村伝承芸能保存会

講師 岡本三千代先生

犬養万葉記念館々長

毎月一回開催・年間十一回

八月は休講

場所 明日香村中央公民館

二階研修室①

日時 毎月・第四木曜

午後一時～二時三十分

会費 当日・五百円、

年会費・三千円

受講生は定例公演に出演することを目標としています。

年一回の県外研修旅行実施

朗唱劇「大伯皇女ものがたり」、第二部は「記紀万葉歌・漢詩の朗唱」、「子ども達の万葉集の歌唱と演技をまじえての出演で、何回も練習を重ねて、素晴らしい発表会になりました。

会場の方からも絶賛頂き、大変嬉しく思いました。いつもと少し違った万葉朗唱の発表会で、皆様にも親しんで頂けたのではないかと思います。

またこんな機会があればいいのにと思いました。

そして平成二十九年一月二十一日に「古事記朗唱大会」が奈良春日野国際ホールで開催されました。奈良県知事を始め各市町村長の出演もあり、個性ある発表に感動いたしました。私達も出演しましたが、勝川先生も初出演で、古事記「上巻・天孫降臨」を、明治三十五年(1902)田中穂積作曲の日本の唱歌「美しき天然」の節で朗唱し、中程のセリフの部分は、朗唱メンバーの「吟詠」も取り入れて、本番では皆さんが一丸となつて、一生懸命頑張つて歌い、無事終了し、ほっと致しました。

こうしてみると過ぎてしまえ



橘寺(東側入り口付近)

ば、楽しい思い出ばかりです。これからは、子ども達も少しずつ参加してくれる事を楽しみに、私達も頑張っていきたいと思えます。そして万葉朗唱が、いつまでも皆様に愛され、後世に繋がっていく事への想いと、魅力ある活動にもっていく事が、私たちの大切な役目ではないかと思っています。

そんな想いから、これからは若い方々が万葉朗唱に、どんどん入部して戴いて、この会が今後益々発展する事を願っています。

南無天踊り

棚田の舞とわたし

嶋村典里

この度、写真家・上田安彦氏より「飛鳥・藤原世界遺産」登録へのDVD制作の協力依頼が伝承芸能にあり、南無天踊りが受けることになりました。

撮影当日は、桜の開花にはまだ早い肌寒い日でしたが、見晴らしの良い稲渚の棚田広場で天気に恵まれ撮影が始まりました。

第一部・皇極天皇の祈り

第二部・雨を願う農民の踊り

第三部・祈りと喜びの踊り

第四部・雨乞いと喜びの踊りです。

順調に撮影が進みましたが、三部はいつもより踊り手が少なかったので、淋しく思いました。一通り撮り終え、次は歌と楽器の録音です。雑音が入らないように気を遣いました。そんな時に飛行機音が入り、撮り直して、当初は二時間の予定が伸び、三時間ほど掛かり無事撮影



平成 29 年 3 月 25 日「南無天踊り撮影会」於：稲渚棚田広場

が終わりしました。

私は今までに何度か撮影に参加させて頂く機会があり、その時は今回とは違い、雨上がりの寒い日で足下はぬかるんで、足袋が泥だらけになったことを思い出しました。

今回、「伝承あすか」に載せる文を考えていて、私は南無天を始めて何年になるのだろうと思いついてみました。十四年位になるのだろうか。

最初は大太鼓の練習から、並行して鐘、大太鼓は当時二人打ちをしていました。人前で披露できるようになった頃、阪神・淡路大震災から六年目、追悼・復興記念式典に参加することになり神戸へ行きました。

その後、二部・四部の踊りを習い、続いて一部・三部と一通り出来るようになり、一人何役もした時もありました。

その他、高田のさざんかホール、初めての遠征が東京国立博物館での披露でした。

また、JR・近鉄奈良駅前、村内では万葉文化館で春・秋定例公演、キトラ古墳行事等たくさんの方からお声を頂き披露出来ることはとても嬉しいことです。

何年か前に、南無天の会員が減り淋しい時期もありましたが、今では多数の方が入部してくださり賑やかになりました。

今後も、初心を忘れず練習に励み完璧に出来るよう頑張っていきたいと思います。

飛鳥蹴鞠

平成29年

4月1日(土) 12時～13時

国営飛鳥歴史公園

石舞台地区

4月26日(水)

れんげ祭り 飛鳥寺

奉納蹴鞠・体験蹴鞠

5月3日(水・祝) 13時30分

～14時 爾20分

国営飛鳥歴史公園

高松塚周辺地区

9月30日(土) 13時30分

～14時 爾20分

国営飛鳥歴史公園

キトラ古墳周辺地区

飛鳥蹴鞠

十七年間の回顧

服部光晴

平成十二年(二〇〇〇)一月、飛鳥蹴鞠復元に取り組んでいる蹴鞠メンバーの許へ一個の鞠が届けられました。長野県上田市信濃乃蹴鞠会の創立者井澤篤巳氏(故人)から譲り受けたものでした。「蹴鞠に関する学

術調査書」を答申の後、鞠を求めて垣内正義・西浦光義両氏(いずれも故人)全国行脚の末の成果でした。さらに、井澤氏と懇意の丸谷昭人氏は皮革商で、鞠づくりを伝承されています。意外にも近隣の丸谷氏にたどり着くのに、時間は要しませんでした。我々の活動に賛同し、鞠や靴など全面的な支援をいただくこととなりました。同年八月、石舞台で多くの文化協会会員に見守られながら、初披露するわけですが、これに先立ち、脇本澄子氏にお骨折りいただき、古代衣装を製作していただきました。

浦谷太郎氏(故人)は復活すべき飛鳥蹴鞠の命名と、競技方法を提案していただきました。日本での最初の蹴鞠は飛鳥寺西槻の木の広場での出来事に因み、飛鳥寺前住職山本實純師(故人)には特にご理解をいただきました。文化協会会長の東謙吉氏はNHKBSおーいニッポンで、多くの文化協会会員を伴い、参加いただきました。

伝承芸能保存会設立間もなく初代会長勝川喜昭氏のご尽

力により、韓国扶余の百済文化祭に招かれ、クドレ広場で蹴鞠を披露して、サッカーが国技の見学者から大いに喝采を受けました。東会長と服部が訪問団に加われず、自費参加となりましたが、修徳寺、水原、ソウル市内などを珍道中したことが、懐かしく思い出されます。読売新聞論説委員の三木健二氏は誌上で、飛鳥蹴鞠応援の記事を掲載していただきました。多くの人に支えられた飛鳥蹴鞠、これからも会員集めは多難ではありますが、服部と共に三十年来の構想の末、蹴鞠復元を果たしたものの、鬼籍に入った嶋岡治君・彼が縁で檀原クアレタのメンバーの参加を得て、存立の危機を脱したことで、伝承芸能保存会の一員として、今後も活動を継続しなければと感じる今日この頃です。

追記 いつも行事の度、我々メンバーの後方で、貴重な時間を割いて、衣装の手入れや賄など送り出、無償の支援をしていただいてる家族の皆様にも、この場をお借りして、お礼申し上げます。ければなりません。



平成29年5月3日「里山あそび広場 2017」於：高松塚公園

この度、明日香村伝承芸能保存会は、ホームページを作りました。
URL <http://densyo.asuka.co>

「伝承あすか」第十八六号
発行 平成二十九年五月
明日香村伝承芸能保存会
会長 岡崎義男
編集 明日香村伝承芸能保存会
題字 「伝承あすか」勝川喜昭書